大衆文学大系

10

監修＝大佛次郎、川口松太郎　木村毅

講談社

大衆文学大系10　田中貢太郎　正木不如丘集
昭和四十七年一月二十日　第一刷

著者　田中貢太郎　正木不如丘
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一大代表　振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©田中道夫　正木良一　一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136107-2253 (0)　(文2)

目次

田中貢太郎集

旋風時代　五

正木不如丘集

木賊の秋　六〇三

三十前　六四九

行路難　六七五

最後の犠牲者　七一〇

蜥蜴の尾　七九
解説　七七
解題　七三
年譜　七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田中貢太郎集

旋風時代

一

明治四年三月のことであった。明治は翌五年に太陽暦を採用して、其の十二月三日を六年の正月元旦としたので、此の四年三月は太陰暦の四年三月であった。

其の三月はじめの某日、芝愛宕下の華族外山具慶の邸では、主人の具慶が八幡屋と云う衣肆の支配人を己の室へ通していた。其処は十畳位敷いた古い室であるが、元諸侯の邸宅であったのを手に入れたもので、柱から天井、欄間の彫刻にも豪奢な生活の痕がしのばれた。其の天井は猿手金唐革で貼ってあった。床柱は紫檀であった。其の紫檀の床柱の上には文明開化を象徴したような八角時計が時を刻んでいた。時計の短針は一時のところにあった。床には長吉の観瀑図の双幅を懸けて、其の前の青銅の花瓶には蕾になった藤の枝を挿してあった。

「書面を見たにしては、あまり早い、使が往き著かないうちに、何か他の用件でもあって、来たのではないか、」

「いえ、お使をいただきましたから、さっそく駆けつけてまいりました、人力車は、案外、早いものでございます、」

「ほう、人力車で、人力車でまいったか、人力車はそんなに早いものか、喃、」

「辻籠よりは、よっぽど早うございます、へい、」

金屏風を後にして黒紋附の羽織に白綾の遠菱の紋のある小袖を著た、六十前後に見える小肥満のした主人に対して、支配人は白い小さな髷ののっかった頭を習慣的にしょっちゅうぴょこぴょこさげていた。

「さようか、わしも、人力車にしようか、喃、わしは、昔から習慣で、馬に乗らん時は、籠にするが、籠は当世むきじゃない、いっそ馬車にしようかとも思うが、馬車は諸生参議どもが乗りおるで、」

「さようでございます、大久保様も、木戸様も、私のぞんじております方は、大隈様も、たしかお馬車のようでございますが、」

「さよう、とびあがり者の諸生参議は、たいてい馬車じゃ、」

「さようでございます、文明開化のありがたい御世になってまいりましたから、乗物も目さきのかわった、佳いものが出来てまいります、私どもの商売でも、やっぱり新しい、目さきのかわったものを、こしらえようこしらえようと、皆で競争しておりますから、」

「さようのうてはならんことじゃ、昔からありきたりの物品を、いつまでも売っておるようでは、だいち、店が繁昌せん、

新柄を工夫して、商売をはげんでゆくのも、天朝への御奉公の一つじゃ、」

支配人はおやと思った。天朝だの尊王だのと云う詞の下から、時おり台所の御用をおおせつけられているのであった。

「御意にござります、」

「ところでじゃ、今日、わしが使をやったのは、御奉公をおろそかにした、いやおろそかと一口に云えるような、そんな生やさしいことではないのじゃ、」

支配人ははっと思った。支配人は額に横皺の多い黄ろな顔をあげた。其の支配人の目の前には、見なれているがいつ見ても鬼魅のわるい脂肪の多かりそうな蒼黒い顔があった。白髪の交った毛を総髪にして後に撫でつけた額のばかに寛い顔が、これも白髪のある毛の長い眉と大きな鼻を見せた下に、紫光のする蠔のような大きな口があって、右の手で持ちそえた金張の煙管をくわえていた。

「どんな不調法がござりましたのでござりましょう、」

支配人はまたぴょっこりと頭をさげた。

「それは容易ならんことじゃ、もしもこれが表むきになると、主翁八幡屋善右衛門の首にもかかわることじゃ、」

八幡屋は用度司の出入を許されていた。一部の公卿と薩長の権勢家の怒に触れたがため、奇禍に逢う者のあるのを知っている支配人は顫えあがった。

「そ、それは、どんな不調法でござりましょう、それは、」

支配人はもう具慶の行為に皮肉な眼をむける余裕がなかった。

「それはたいへんなことじゃ、困ったことをしてくれた、喃、」

「は、」

「前月、用度司へ納めた夜の物じゃ、」

「彼のお蒲団が、どうかなりましたのでござりましょうか、」

具慶の大きく結んでいた口が、ぱくりと音でもしそうに開いた。

「縫針が、二本、入っておったのじゃ、」

「え、縫針が、」

「さよう、縫針が二本入っておったのじゃ、」

「それは、」

「恐れ多い失態じゃ、」

用度司から夜の物調製の命を受けると、室は固より職人にも身を清めさして、仕事をはじめる時には、それぞれ己の手から針と糸を渡し、仕事を措く時には、一いち又それを受け取っているので、針などの入っているはずはなかった。支配人は日限に遅れないようにと調製した物品を、主人とともに納めに往った日のことを思いだした。四人舁の舁台二台へ乗せた物品の上に、唐草模様の著いた大風呂敷をかけ、、、、、、を入ったところで門鑑をさげてもらい、、、、から、、へ往って、厚い欅板で張った廊下を通り、、、の前も過ぎて畳廊下にかかったところで、ちょっとした室があって通りがかりに見ると、大さびの立烏帽子に志志良の白綾の直衣を着た気品のある人が座っていたので、何人であろうかと思って用度司の人に聞くと、あれが徳大寺大納言だと教えられているのであった。支配人は事が大きいので習慣的に体を取りあつかうことができなかった。支配人の頭は其の時はさがらなかった。

「私の方では、御用命にあずかりますと、平生のように神職をたのんで、表座敷へ注連縄を張ってもらいまして、職人には水垢離を取らし、口から鼻へは白い布をかけまして、それで四人の職人に、毎日私が、それぞれ針と糸を渡しまして、仕事を措けば、また其の針と糸を、一いち受け取るようにして、不調法

のないように、ないようにと、念のうえにも念を入れて、しあげましたもので、また、納めます時には、主人と二人でまいりましたから、」

具慶は眼をつむるようにして煙管を口にやっていた。

「それは、たいへんなことになりました、」しかし、こうなっては針の有無を云ったところで何にもならなかった。苦労人の支配人は、此のうえは家の浮沈に関する一大事件を、そっと収める方法を講ずるより他に途がないと思った。「今となりましては、いかに申しひらきをいたしましたところで、それは、もう、後の祭と申すものでございます、此のうえは、お詫びをするより他に、途がない思います、」

羣の口から煙管が除れて、それが前の淡巴孤盆の灰ふきにかちりと音をたてた。

「さよう、お詫びをするより他に途がない、喃、」

「つきましては、御贔屓にあまえるようで、なんとも、はや、申しわけがございませんが、こうなりましては、おかみにおすがりするより他に、おすがりする方がございません、どうかおかみの力で、」

「そこじゃ、八幡屋は、祖父の卿の時からの出入で、わしの代になっては、勤王の彼の騒ぎで、手許不如意な際には、無理を頼んだこともあるから、なんとかしてやりたいが、事が事じゃで、喃、」

二

支配人は額を畳の上にすりつけて這いつくばうようにしていた。

「誠に、なんとも、はや、申しわけがございませんが、こう申しあげましては、御恩になれすぎるとお叱りもございましょうが、長い間、御贔屓くだされております八幡屋を、其の御贔屓ついでと申しましては、恐れ多い儀でございまするが、そこのところを、」

「それは、判っておる、判っておるが、他のことでないから、喃、」と、ちょっと切ってから、「わしも、それで心配しておるのじゃ、」

「は、」

「とにかく、困ったことになったものじゃ、が、ただ一つ此のことは、まだ表むきにならずに、万里小路卿の許にあると云うことが、手段によって、どうにかなりはせぬかと云うことが、一縷の望みのあると云うものじゃ、」

「は、」

「それは、わしが、昔から八幡屋を贔屓にしておることも、万里小路卿が知っておられ、用度司へ周旋したのも、わしじゃと云うところから、万里小路卿が知らして来たと云うものじゃ、」

具慶はそう云って左の明障子のあるほうへ眼をやった。其処には紫檀の書架があって、三段になった其の棚には、中の段と下の段に古い表紙の書物だのを置き、上の段には半切や唐紙の巻いたものといっしょに、古い尺牘のようなものをごたごたと置いてあった。万里小路卿から来た尺牘も其の中にあると云う意がこもっていた。

「誠に、なんとも、はや、申しわけがございませんが、どうかおかみから、万里小路様に、お取りなしを願います、」

「万里小路卿は、親しい関係じゃから、わしが手をつくしてお詫びをするなら、むげに、わしの面目を潰すようなこともあるまいと思われるが、周囲におる者が煩そうて、喃、」

「御意にございます、」

「事あれかしに待っておって、なんでも啄を入れて、一理窟

こねんと承知ができんと云う、諸生参議がおるで喃、」
「御意にござります、」
「なかでも、大久保市蔵と、大隈八太郎と来たら、いやはや、始末にわるうて、喃、」思いだしたようにして、「それに、それに大納言の岩倉卿と来ては、一すじ縄ではいかん物品じゃ、」
「御意にござります、」
「そこでじゃ、これを内密にするには、つい知れてもかまわんように、口どめ料が相当にいると云うものじゃ、」
「それは、もう、金のことはなんでございますから、どうか何分お詫びのできますように、」
「わしも浪人しておるから、身金を切って取りなしてやることもできんが、」
具慶は平公卿で維新前には青蓮院宮に出入し、維新後は薩長の勢力に攀援していたが、東京へ移ってからは何もしていなかった。京都に本店を持っている八幡屋の支配人は、鷹司邸へ太政官の置かれた時、征東軍の肩章にする錦の用命を受けて出頭してみると、鎮守の社の拝殿のように荒ごもを敷いた室へ経机を並べて集まっていた、初めて衣冠を着けて窮屈そうにしている各藩の有志に交った公卿のなかに、具慶のいたことを思いだした。
「お金ですみますことなら、八幡屋の暖簾にかえられません、私主人がなんと申しましても、私が一存でお願いいたします、」
「よろしい、其の詞を聞くなら、引きうけてつかわす、ただし、事が事であるから、千や二千の金ではいかんが、承知か、」
「お受けいたしました、どうかお取りなしをお願いいたします、」
具慶は勢いよく吸殻を灰ふきにはたいた。
「委細承知、」
「それでは、一度店へ帰って出なおしてまいりますから、」
支配人が帰ろうとすると、具慶は手を打って人を呼んだ。入道頭の赧い地に白いさかやきの延びた老人の顔が襖の間から出た。家令の粟田であった。
「此の者が帰ると申すから、送ってつかわせ、」
「は、」
粟田が背の高い黒い袴をはいた体をつつましく運んで、支配人を送り出して往くと具慶は蒼黒い顔ににんまりと笑った。其処には大きな鼻がのんびりとぶらさがっていた。具慶はひどく心の満足を感じていた。具慶は無意識に煙管を持って淡巴孤を詰めて喫んだ。喫んでいるうちに便通を催して来たので、起って一方の障子を開けて縁側へ出た。縁の前には葉になった梅の枝があって微陽が射していた。
便所は縁側の突きあたりにあった。具慶は用をたして室へ引返し、障子を後手にしめたところで、支配人と粟田の出て往った方の襖が開いて壮い女が顔を見せた。侍女のお多喜が室の後始末をしに来たところであった。
「ごめんあそばせ、」
「多喜か、持って往くがよいぞ、」
「は、」
お多喜は中へ入って手にしている盆へ、まず客の茶碗と菓子皿を執り、それから主人の前のものを執って乗せた。具慶は其のお多喜に眼を注けた。
「多喜、今日は久しぶりに、象棋を教えてつかわそうか、」
「は、」
お多喜は蒲団の上へ座ろうとした主人の方をちらと見て、心もち下顎の出た口もとに莞とした。其のはずみに白く透きとおった前歯が二三枚見えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「それでは、すぐ象棋盤を持ってまいれ、」
お多喜は急いで出て往った。具慶は其の後をじろりと見送ったが、女の姿が見えなくなっても顔を其のままにしてうっとりとしていた。と、襖がまた開いて粟田が顔を出した。具慶はちょっとどぎまぎして顔をなおして威厳をつくらった。
「粟田か、八幡屋はもう帰ったか、」
「は、何か急ぐことでもございましたか、あわてて、乗って来た人力車で帰りました、四人がかりの人力車でございましたから、早うございましょう、」
「さようか、」
「は、それから、おかみに面会したいと申す者がまいりましたが、」
「また、浪人じゃないか、」
「長い奴をさした、福岡の者だと申しておりますが、」
「いかん、いかん、また、薩長の悪口であろう、もう時勢が過ぎた、浪人の役にたつのは次の時勢じゃ、今は金のある奴じゃ、金のない奴を対手にする時じゃない、病気じゃと云うておっかえせ、」
「承知いたしました、」
粟田が引込もうとするところへ、お多喜が象棋盤を捧げるようにして持って来た。
「来たか、来たか、久しぶりに負かしてつかわすぞ、」
お多喜は返事を微笑にかえて象棋盤をおろした。象棋盤の上には子の入った箱があった。
「わしは、今度、珍しい手を発明したぞ、対では、もうそちは勝てんぞ、」
「は、」
「片馬おろしてつかわそうか、喃、」
「おろしていただきます、」
「急にいじめてもかあいそうじゃ、まあ、対でいこう、」
「それでも、」
「まあ、よい、」
二人は子を並べた。
「さあ、まいるぞ、」

三

具慶の声とともに双方の子が動きだしたが、使われている者は使っている者におもねる子の遣いかたをしなくてはならなかった。しかし、此の使っている人の心は象棋になかった。象棋はある段階に達するまでの手すさびにすぎなかった。具慶は「そう来たか、」「しからば、こうまいるぞ、」「それはわしの手ぬかりじゃ、」などと云うように詞を挾んでいたが、何時の間にか黙ってしまった。黙ってしまったのはもう象棋をやる必要がなくなったからだ。
「そちの手には、何がある、」
具慶は筋書を運ぶ必要上、棋客の何人もが口にする詞を口にした。
「金が一枚と、桂が二枚、あとは歩でございます、」
「そうか、金が一枚と桂が二枚と、」具慶はそう云って己の手にした子を見て、「勝ったぞ、王手とまいるぞ、よいか、」
お多喜は返事のかわりに微笑を見せた。
「どうじゃ、勝ってもよいか、」
「どうぞ、」
「それでも気の毒じゃ、すこし、わしの肩を揉みながら、良い手を考えては、どうじゃ、」
「は、」

主人の詞に対してすこしの躊躇もできないように習慣づけられているお多喜であった。お多喜は手にしていた子をおいて起った。

「八重は、何をいたしておるのじゃ、」

「お八重様は、清元のお師匠さんがまいりましたから、お室でございます、」

「さようか、」

お多喜はふと、おかみはお八重様に気を配っているのではあるまいかと思った。そう思うと二人きりでなれなれしくしているのがうしろめたかった。それにしょっちゅう己を見はっているような女の挙動が気になった。お多喜はこわごわ具慶の後へ立って肩を揉もうとしたが、ほんとに揉んでよいのか叩くのかそれが判らないのでおずおず聞いた。

「あ、の、お叩き、申しましょうか、お揉み申しましょうか、」

「揉んでもらおうか、喃、」

「は、」

お多喜は具慶の両肩へそれぞれ細そりした指をかけて揉んだ。

「お多喜は、幾歳であったか、喃、」

「十八でございます、」

「ほう、十八か、」と云ってちょっと詞を切ってから、「十八になれば、女子は、もう大人じゃ、」

お多喜は後にいるので微笑をもって応えることができなかった。お多喜はなんとか云って返事をしなければならないと思ったが、其の返事が見つからなかった。こうして思いわずらっているお多喜の左の手首へねっとりした指がからみついた。具慶の右の手であった。お多喜ははっと思って体がふるえたが、声をたてることもできなければ、揮り払って逃げることもできなかった。お多喜は侍女として絶対の服従を強いられていた。お多喜ははらはらしながら其の方へ眼をやった。其処には斜に後を見あげた具慶の蒼黒い顔があったが、其の眼には蛇の眼を思わすようなぬめりがあった。

「どうじゃ、」

お多喜の手首にからみついていた具慶の手に力が加わって、それがために自由を失ったお多喜の体は、具慶の左の肩さきに触れながら其の膝の上へ倒れかかった。お多喜は具慶に抱きすくめられたのであった。

「ご、ご、めんあそばせ、」

お多喜は具慶の手から脱けようとしたが、脱けることができなかった。

「そんなに、こわがるものじゃない、」

鬼魅わるい皮膚のほてりがお多喜の片頬に来た。お多喜は呼吸ができないほど恐ろしかった。お多喜は夢中になって体をもがいた。文金の高島田の元結がはじけた。

其の時襖が音もなくすうと開いて、そうっと入って来た者があった。恐れでもがいているお多喜は元よりのことであったが、具慶にもそれがわからなかった。

「なにを、なされるのでございます、」

具慶は驚いて顔をあげた。濃艶な顔に怒を帯びた三十左右に見える年増の美女が立っていた。

「そちか、」

「そちかではございませんよ、ほんとに、」

お多喜を押えつけていた具慶の手がゆるんだ。お多喜はやっと跳ねおきることができた。

「油断もすきもあれやしない、児の癖に、ずうずうしいったら、」

女はいきなりお多喜をつきとばした。女は病弱な夫人の地位を奪っている侍女頭のお八重であった。お多喜は緋い裳をほらほらと乱して出入口の方へ往って膝を突いた。お八重はそれを追っかけて往った。

「そんなに、八重、」

具慶の詞は絹をさくように甲ばしった声に押し潰された。

「だめでございますよ、こんな奴、わたしが赦しませんよ、」お八重の手はお多喜の襟元にかかった。「ふざけた真似をしやがって、此方へお出で、」

お多喜は主人の愛をたのんでわがままいっぱいに振舞っている気性の激しい暴君を恐れないではないが、己としてはすこしもやましいところがなかったので動かなかった。

「何処までずうずうしい奴だろう、お出でったらお出で、」

お八重は二三度こづきまわしておいて力いっぱいに引きたてた。痺弱いお多喜の体は引きずられた。お多喜はたちあがらずにはいられなかった。お多喜はよろよろと起ってお八重に引きたてられて歩いた。二人の跫音はどたどたと鳴った。

「なにを、なされるのです、」小さくはあるが響の強い声が八重の邪慾にほてっている鼓膜を打った。羊のように従順な女もあくまで踏みにじられてはいなかった。彼は自由な人間性を見ているのではないが、それでも僅な衣食を給するがために、何の顧慮するところもなく、己を踏みにじろうとした対手をせめないで、踏みにじられようとした己をせめるとは不合理にもほどがあると思った。「わたくしが何をいたしました、」

「わたくしが何をした、己のしたことがわからないの、」お八重はお多喜の襟元をつかんだ手にまた力を入れてこづきまわした。「此のあま、」

立矢の字に結んだお多喜の金茶色の帯がゆれた。お多喜は其の返事を眼にあらわしてじっとお八重の顔を見た。

「お出で、」

お八重はさも憎そうに云って引きたてた。お多喜はどこへでも往ってやれと云うようにしてどんどん歩いた。

「此方へお出で、」お八重は何時の間にか左側になった室の襖を開けていた。「此方だよ、」

お多喜の前へ往こうとしている体は左にねじ曲げられた。

「なにを、ぐ、ず、ぐずするのだ、」

お多喜の体は室の中へ流れこんだ。流れこんだ拍子に爪さきが浮いてよろよろとなって倒れてしまった。

「さあ、動けるなら動いてみるがいい、児の癖に、ふざけた真似をしやがって、どうするかみろ、」

四

三十女の力にはかなわなかった。お多喜はふり放すことができないので、お八重のするがままになっていた。お八重はまたこづきまわした。

「わたしの目をかすめやがって、油断もすきもありゃしない、おかみもおかみだ、」お八重はちょっと怒を具慶へ移したが、

「だが、汝がそばへ往って、じゃらじゃらするからだ、」

お八重は毒どくしい性情を赤裸裸にあらわしていた。

「わたくしは何も悪いことをした覚えはございません、わたくしが何をしたのでございます、」

「何をした、この横道漢、」

お八重の拳は二つ三つお多喜の頭へ往った。と、気配がしてお多喜の襟元にやっていた手は、はじかれるように強い力に押しのけられた。

「あんまり手あらなことを、しなさるものじゃねえ、」

歯ぎれの良い壮い男の声がした。お八重は機をくってよろよろとした拍子に体が真直になった。眉の濃い面長な壮佼が其処に立っていた。表と奥の間をあちこちして用使をしている小厮の龍吉であった。小柄な鰐背な此の壮佼は、諸生のように頭を散斬にして、ちんちくりんの薩摩飛白の袷へ兵児帯をしめていた。お八重は物の数に入れていない小厮から、ほとんど突きとばされるような目にあわされたのでいきりたった。

「何をするのだ生意気な、此処は、汝なんかの来る処じゃないよ、」

龍吉は叱りつけられて癪にさわったが、主人の寵姫と云うことを知っているので、朋輩に対するようにはできなかった。

「あんまり酷いから来たのです、云うことがあれや、きれいに云ったらいいじゃありませんか。ぶったり、なぐったり、あんまり酷いじゃねえか、」

「何が酷い、汝なんかの知ったことじゃない、酷いことをするには、するだけのわけがある、汝なんかが口を出す処じゃないよ、」

龍吉の両頬には血がのぼって、それが龍吉をばかに佳い男に見せた。

「口を出す処じゃないかも知らねえが、あんまり酷いことはしないがいいでしょう、可哀そうじゃありませんか、こんなおとなしい人を、」

「いやに肩をお持ちだが、此の子は汝の何かかい、彼方へお往き、」

「往きます、わっしは何も好んで、こんな処へ来たくはねえが、此の人が可哀そうだから来たのですよ、」と云って、死んだ人のようにして下を向いているお多喜を見おろして、「汝さんは何をしたかは知らないが、悪いことがあったら、あやまっといて、彼方へ往くがいいでしょう、此処で酷い目にあわされるにもあたらない、」

「お黙り、お黙りってば、お前なんかのような、はっぱ野郎の知ったことじゃない、すっこんでろ、」

頭から龍吉を叱りつけておいて、見るともなしに入口の方へやったお八重の眼に、襖の引手に沿うて此方を覗いている数多な眼が見えた。お八重は朋輩の侍女達にはしたない容を見られたくなかった。こうしたはしたない容を邸内の者に知られることは、将来の利害に大きな関係があるのであった。お八重の複雑な心が其処に動いた。お八重はまずかったと思うとともに、己を此処にいたらしめたお多喜がまた新しく憎くなった。お多喜が憎くなるとともに意地ぎたない具慶にも其の憎しみが往った。

「ほんとに厭な奴ばかりだ、」

お八重はそのまま室を出て往った。廊下の人影はそれと見て散らばった。お八重は廊下を引返して具慶の室へ入った。其処には具慶が象棋盤を其のままにしてすまして淡巴菰を喫んでいた。お八重は襖をぴたりとしめるなりずかずかと其の前へ往って、何も云わずに鼻と鼻とが触れあうようにして座った。

「如何いたした、」

具慶はにやりと笑って見せたが、お八重は返事もしなければ顔の筋肉一つ動かさなかった。

「如何いたした、そちは何か思いちがいをしておりはせんか、」

お八重はそれでも黙っていた。

「そちは、思いちがいをしておるぞ、彼の児にも可哀そうではないか、」

お八重の口が其の時開いた。

「あんなずうずうしい奴、何が可哀そうでございます、わたくしを踏みつけにした奴でございます、」
「何を踏みつけにいたしたのじゃ、」
「そんなことおっしゃって、おとぼけになっても、だめでございますわ、」と具慶の顔を見かえして、「おかみが、彼の子に眼をつけていらっしゃることは、とうに、わたくし、そんじておりますわ、」
「そんなことがあるものか、退屈であったから、あれをからかっておったところではないか、」
「そんな児だましのようなことで、わたくしがだまされるとお思いになりまして、」と嘲けるように云って、「何処までも、おかみが、わたくしを無いものにして、たれにもかれにも、そんなことを遊ばすなら、わたくしにも考えがございます、」
「どんな考えじゃ、」
「それは、今申しませんが、わたくしは、おかみに捨てられるようなことがございましたら、生きてはおりません、其のかわりに、わたくしはきっと讐を討ちます、」
「どんな讐か、喃、」具慶はひやかすように笑って、一方の手をいきなりお八重の首筋にからまして、「こんな、怖いことをするのか、」

いっぽうお八重にへこまされた龍吉は、もう前後のことも忘れて両手に拳をこしらえ、もう一度云ってみろ、其のままではおかないぞと云う気になって、後から出るお八重の詞を待っていたところで、不意にお八重が往ってしまったので、腹は治まらないが対手がいなくてはしかたがなかった。
「畜生、」と吐きだすように云って、ふと見るとお多喜が其処へ座ったままでうなだれていた。「汝さん、何をしたか知らないが、あんな奴に負けてると云う法はねえ、あん畜生、旦那を笠にきやがって、酷いことをするものだ、」と云ったが、もともと事情もわからなければ、小厮の分際ではどうすることもできないので、「話はあとでわかるのだ、彼方へ往くがいいや、」
龍吉はまだ何か云って慰めてやりたかったが、其の詞が見つからないので心をのこしながら室を出て、往くともなしに具慶の室とは反対になった方へ往った。
「龍吉さん、どうしたの、」
笑い声で云って後から追って来た者があった。龍吉は気が注いて振りかえった。姉小路の後室様附のようになっているお浜と云う仲働きであった。お浜は三十位の顔の平べったい女であった。
「へエエエ、」
龍吉はお浜に己のへこまされたところを見られていると思ったので、指で右の小耳のあたりを掻いて見せた。
「さすがの色男もだいなしだね、」
「あん畜生、ふざけてやがるのだ、なぜ、あんなにお多喜さんをいじめるだろう、」
「理があるのだよ、」
「理ってどんなわけです、」
「まあ、此方へいらっしゃい、云ってあげるから、」
「何処です、」
「汝さんのことを、いつも噂してらっしゃる方の処だよ、」
「へッ、」
龍吉は苦笑した。龍吉は小厮の己などに洟のひっかけてもないことは知っているが、此の比用もないのに己に近しくして冗談口を利くお浜のことであるから、また無駄口の対手にされるだろうと思った。

「ほんとだよ、いらっしゃいよ、」
「何処だね、」
「何処でもいいじゃないの、汝さんを、田之助に似てるって、おっしゃる方の処だよ、」

五

たしかにお浜は己を無駄口の対手にするつもりだと思った。龍吉は煩さかった。
「そんなことを云って、またからかうつもりでしょう、いやだよ、」
「うそよ、わたしが、ちょいとからかってみたのだよ、」
「何処です、」
「其処よ、いらっしゃいよ、」
「からかうでしょう、」
龍吉はそう云い云いお浜の後から随いて往ったがなんだか不安であった。
「何処です、」
「すぐ其処よ、何も心配すること、ないのよ、」
お浜は笑った。畳廊下は其処で右にわかれていた。それは表座敷の方へ通じている廊下であった。二人は真直に往った。其処は奥の入口で直ぐ渡廊下になっていた。渡廊下の左右は広い庭になって、其の右の方の庭には嫩葉をつけたばかりの木立の上に赤松と黒松の長い幹があった。嫩葉の木立は椎楓要冬青などであった。其の木立の間からは緑青色をした池の水がのぞいていて、それには朱の欄干の附いた反橋がかかり、縁には苔のむした一基の石燈籠があった。石燈籠のあたりに桜の花片の一つ二つ散るのが見えた。左の方の庭には芝生になって飛石を置き、其の果に仮山の岩の透けて見える疎な木立があって、其の中に亭の一つが微陽を受けて浮きあがるように見えていた。其処には飛石のそばにも仮山の縁にも躑躅の木があった。
「龍吉さんは、お多喜さんが、お八重さんにいじめられている理が判らないの、」
「判らないのです、」
「己とみかえられちゃ、困るからだよ、」
「見かえられるって、何人に、」
竜吉はちょいとわからなかった。
「判らないの、おかみが、此の比、お多喜さんを追いまわしているのだよ、」
「まさか、おかみが、」
「汝さん、それが判らないの、ほんとに嬰児、ねえ、」
「……」龍吉はしかたなしに笑った。
「だから、汝さんが、いくら目をつけたってだめよ。お多喜さんは、犠牲にあがってるのだもの、それにあんな、ねんねえじゃ、なんとかなったところで、汝さん一生苦労しなくちゃならないわよ、それよりゃ、おいしい物がたべられて、佳い衣服が着られて、それで遊んでいられる、好い人を見つけなくちゃ、うそだよ、」
龍吉は何の他愛ないことを云っているのだ、きいたふうなことを云っても、女はやっぱり女だなと思った。龍吉は二十三の其の日まで下積の苦労をいやと云うほどなめさせられているので、お浜のいい気になっているようなのがおかしかった。二人は其の話の間に二室ほど通っていた。
「そんなのに、ぶっつかりたいものだね、芝居がしょっちゅう見られていいのだ、」
「そうだよ、だから執りもってあげるよ、」
「あるなら、なあ、」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com